

L10b 串田彗星 (144P) および鹿林彗星 (C/2007 N3) の偏光撮像観測

古荘 玲子 (国立天文台)、篠田 知則 (彗星物理水曜ゼミ)、渡部 潤一 (国立天文台)

彗星の偏光観測は、彗星ダストの特性を探る上で非常に有用な手段である。我々のグループでは、彗星用の広視野可視偏光撮像装置を開発し (Ikeda et al. 2007)、これまでに 11 彗星の偏光観測を行った。特に 2006 年以降は、国立天文台三鷹の 50cm 社会教育用公開望遠鏡を利用して、モニタ的な観測を行ってきた (e.g. 2008 年秋季年会発表 (A34a))。

今回、串田彗星 (144P) および鹿林彗星 (C/2007 N3) の観測結果を中心に報告する。串田彗星の観測は 2009 年 1 月中旬 13 日～15 日に行われ、位相角  $34^\circ$  付近の観測データが得られた。この観測は、すばる望遠鏡による中間赤外観測とほぼ同時期に実施されたものである。一方、鹿林彗星の観測は 2009 年 1 月末～2 月に行われ、位相角  $51^\circ$  付近から  $18^\circ$  付近までの広い位相角範囲でのデータが得られた。

発表では、異なる位相角における観測の結果を比較し、串田彗星、鹿林彗星それぞれの彗星ダストについて議論する。また、これまでに同装置で観測された他の 9 彗星のデータも併せて比較議論を行う。